

大好きなひいお婆ちゃん

傍陽小学校 六年 小山 結愛

私のひいお婆ちゃんは、今年の九月に九十七歳で亡くなってしまいました。本当は、十月で九十八歳になるはずでした。

ひいお婆ちゃんは、もう九十七歳だというのに、手すりにつかまれば一人で歩けるほど元気でした。それに、声が大きくて、面白い話を沢山してくれました。でも、時々ひいお婆ちゃんとテレビの取り合いをして、ひいお婆ちゃんにも子どもみたいなのところがあつて、なんだか少し「可愛いなあ」と思いました。そして、ひいお婆ちゃんには、今年の十一月で百歳になるお姉さんがいます。ひいお婆ちゃんも、お姉さんも姉妹二人とも長生きで元気なので、私は「凄い!!」と思いました。

でも、去年の十一月にひいお婆ちゃんが転んで骨折してしまいました。ほとんどの人が骨折をすれば、手術をすると思います。でも、ひいお婆ちゃんも九十七歳。それに、心臓も悪く、お医者さんからは「手術をしている間に死んでしまうかもしれない」と言われました。私は、本当は「手術を受けてまた歩けるようになってほしい」と思っていました。でも、それよりも「ひいお婆ちゃんに生きていてほしい」と思いました。家族皆で話し合った結果、手術はしないことになりました。

しばらくして、入院していたひいお婆ちゃんが帰って来ました。今までとは違い、ひいお婆ちゃんは、車いすで生活するようになりました。前のように歩くことはできなくなってしまいましたが、とにかく帰って来てくれて嬉しかったです。

車いすで生活するようになったひいお婆ちゃんを、お婆ちゃんが介護するようになりました。私も、家族の皆と協力して、自分にできることをしました。ひいお婆ちゃんは、いつも皆に「ありがとうね。」と言っていました。

ですが、九月六日。ひいお婆ちゃんが亡くなってしまいました。最後は、家族皆で見送りました。悲しかったし、つらかったし、苦しかったし、沢山泣きました。「大好きな人がいなくなってしまうのは、こんなに悲しいんだ」と感じました。それに、「今まで自分が誰に支えられていたのか」ということにも気付かされました。お婆ちゃんには、「生命が誕生するところから見送りまで本当にいい経験だよ」と言われました。

大切な人がいなくなってしまうても、私達は生きていかなければいけません。凄く悲しいことですが、お婆ちゃんの言う通り、「命」や「人権」のことについて考えるいい経験になりました。今でも、ひいお婆ちゃんは私達のそばにいて笑ってくれているような気がします。これからは、家族や友達の命、そして自分の命をこれまで以上に大切にしていきたいです。